

《研究課題名》

ヘリコバクターピロリ菌陰性胃癌の発生機序に関する検討

《研究対象者》

1990年1月～2020年9月まで大分大学医学部附属病院、大分赤十字病院、大分三愛メディカルセンター、大分県厚生連鶴見病院、新別府病院、有田胃腸病院、あべ胃腸病内視鏡クリニック、湘南鎌倉総合病院で胃腫瘍を内視鏡的、あるいは外科的に切除された患者、あるいはヘリコバクターピロリ菌感染診断目的に生検を受けた患者(滋賀医大附属病院の患者情報や試料は用いません)。

研究協力をお願い

滋賀医科大学において上記研究課題名の研究を行います。この研究は、対象となる方の既に保有している試料・情報を用いて行う研究であり、研究目的や研究方法は以下の通りです。試料・情報の使用について、直接ご説明して同意はいただきず、このお知らせをもって説明に代えさせていただきます。対象となる方におかれましては、研究の主旨・方法をご理解いただきますようお願い申し上げます。

なお、本研究に関するご質問は下記(4)の問い合わせ先へご連絡ください。

(1) 研究の概要について

《研究課題名》

ヘリコバクターピロリ菌陰性胃癌の発生機序に関する検討

《研究期間》 滋賀医科大学学長許可日～2025年10月31日

《研究責任者》 滋賀医科大学 医学部 病理学講座 講師(学内) 石垣 宏仁

(2) 研究の意義、目的について

《意義》

癌は遺伝子の病気だということが最近、明らかになってきました。遺伝子の病気といっても親から子へ伝わっていく遺伝的な病気ではなく、体細胞の遺伝子(例えば胃の細胞や肺の細胞の遺伝子)が量的あるいは質的に異常を起こし、正常な細胞増殖の制御機構が働かなくなり自律的な増殖をするようになると、癌が出来ると考えられています。

胃がんの多くはヘリコバクターピロリ菌感染が原因であり、ヘリコバクターピロリ菌の除菌治療により胃がんの発生率は抑制できることが明らかになってきています。一方、頻度は1%程度と稀ですが、ヘリコバクターピロリ菌の未感染の胃癌粘膜にも、胃がんが発生することが知られています。本邦では、年々ヘリコバクターピロリ菌の感染率は低下しており、今後、相対的にヘリコバクターピロリ菌の未感染、既感染(除菌治療後)、あるいは自己免疫性胃炎の胃粘膜に発生する胃腫瘍(癌)の増加が予想されています。これらの胃腫瘍の遺伝子変化を調べることによって、発生機序(胃がんが発生、増大あるいは癌がまわりに広がっていくメカニズム)に迫ることができれば、胃がんの予防や治療につながることを期待できると考えています。例えば、胃がんの遺伝子変異の異常が特定できれば、新たな創薬などの治

療に役立てる可能性があると考えています。

《目的》

本研究では、胃腫瘍に対する内視鏡治療を受けられた患者さん、あるいはヘリコバクターピロリ菌感染診断を受けられた患者さんの上部消化管内視鏡写真、胃粘膜組織の蛋白・遺伝子の発現に違いについて調べます (DNA、RNA、蛋白を実験機器を使って調べて、遺伝子の変異の有無や量的異常、がんが遺伝子の突然変異を伴わずに発生する仕組み(エピジェネティックな発がん機構)について調べます)。ヘリコバクターピロリ菌に感染している状態での胃腫瘍や胃粘膜と比較する必要があるため、ヘリコバクター菌感染がないと診断された患者さんに加えて、感染があると診断された患者さんの情報、検体(胃の組織)も研究利用させていただきたいと考えています。尚、本研究で得た癌組織や患者さんの診療情報と抽出されたDNAは、国立がんセンター研究所ゲノム解析分野に送られ、遺伝子の解析が行われます。

(3) 研究の方法について

《研究の内容》

本研究は、大分大学を中心に、滋賀医科大学、国立がん研究センター研究所、大分大学医学部附属病院、大分赤十字病院、大分三愛メディカルセンター、大分県厚生連鶴見病院、新別府病院、有田胃腸病院、あべ胃腸病内視鏡クリニック、湘南鎌倉総合病院が協力して行う多施設共同研究です。

滋賀医科大学では、共同研究施設から提供された病理標本について、病理組織学的な検討を行います。

《利用する試料・情報の項目》

診療録および病理標本、臨床情報(年齢、性別、生活歴、既往歴、内服歴など)および内視鏡情報

《試料・情報の管理について責任を有する者》

大分大学医学部 消化器内科 客員研究員 福田 昌英
滋賀医科大学 病理学講座 講師(学内) 石垣 宏仁

(4) 本研究に関する問い合わせ先

担当者：滋賀医科大学 病理学講座 石垣 宏仁

住所：520-2192 滋賀県大津市瀬田月輪町

電話番号：077-548-2172

メールアドレス：ihiro@belle.shiga-med.ac.jp